

# のれんの奥に文化あり

## 一橋大大学院 宿題「1人居酒屋」

1人で居酒屋に行く。これが一橋大学の大学院の宿題だ。赤ちようちんを都市の文化空間とみなした、れっきとしたフィールドワーク。学生たちにとって、異文化との出会いの場でもある。

6月下旬の日中、東京都昭島市。同大学院修士課程1年の松山彩音さん(23)は、西武拝島線拝島駅前で居酒屋を探していた。

殺風景なビルの1階で、赤ちようちんを発見。引き戸のガラス戸越しに、カウンターで飲む人たちの声が聞こえた。近隣の店より際だって地味な店構えだ。

「常連客ばかりに違いはない。ここにしよう」

そう心に決めたが、居酒屋に1人入るのは初めて。20分ほど店の前をうろろした末、思い切ったのれんをくぐった。

「自分の感覚を頼りに探した飲食店に1人で行くこと。ただし、チェーン店はダメ」。それが社会学の授業で出された課題だ。4月以降、居酒屋が都会人に欠



課題のフィールドワークを終えた後、再び拝島駅周辺の飲み屋街を訪れた松山彩音さん＝11日、東京都昭島市

かせない「居場所」になっていることを文献などで学んできた。フィールドワークは、その仕上げとなる。

### ひとつの社会

油染みのある天井、むき出しの換気ダクト。飾り気のない店内で、初老の男性客たちが迎えてくれた。いずれも地元の住民だった。

「店主はお母さんみたいなものだよ」。話は弾み、本当は夜にしか出ない「裏メニュー」の存在も教えてもらった。40代後半らしき男性は「自分の素性はあんまり話すもんじゃないよ」と耳打ちしてくれた。さらに飲み、話すうちに、「いま、愛してる人がいるんだよ」としみじみと身の上話までしてくれた。

ふだん行く居酒屋は、チェーン店ばかり。見知らぬ人と交わることは、まずない。「居酒屋は一つの社会

ユニティーなんだと腑に落ちた。対話を鍛える絶好の場ですね」

店は「発見」の連続だった。夜の客は滞在時間が短い。電車の本数が少なく、仕事帰りの乗り換え客が時間つぶしに使っているようだ。店の壁にかかる時計が5分進んでいるのは、お客が電車に乗り遅れないための気配りでは。ホッピーのアルコールが濃いのは、短時間で酔えるようにという配慮では。考察が深まる。昼の客は長居するといろ。後で調べたら、周辺に高齢者向けの公共施設が少ない。家族以外の人と関わ

る場を求めて集まっているのでは――。松山さんはデータも交えて分析し、7月の授業で発表した。

### 日常に面白み

この授業は9人が受講。焼き鳥店で隣のおじさんに声をかけて無視されたり、地元の人が多い立ち飲み屋で居心地の悪い思いをした。それぞれの体験を元にレポートをまとめた。

担当教諭は、米国出身のマイク・モラスキー教授(56)。元々の専攻は日本文学だが、ジャズピアニストとしても知られる。1976年に来日し、米国の都市には少ない個人経営の居酒屋の魅力にとりつかれて1人で通うように。昨秋、居酒屋に通った経験に都市文化を巡る考察を加え、随筆「呑めば、都 居酒屋の東京」(筑摩書房)を出版した。

ありふれた日常の中にも、感覚を研ぎ澄ませて観察すれば、おもしろさが見える。そんな経験を積み、自分たちの住む町の奥深さを知ってほしいと、数年前から「1人居酒屋」の課題を出すようになった。ネットが普及し、似た者同士でしか関わらない傾向が強まる今こそ、他者と関わってほしいとも思う。「異文化を通してこそ、自分を知り、社会を知ることができるとは思いません」(仲村和代)